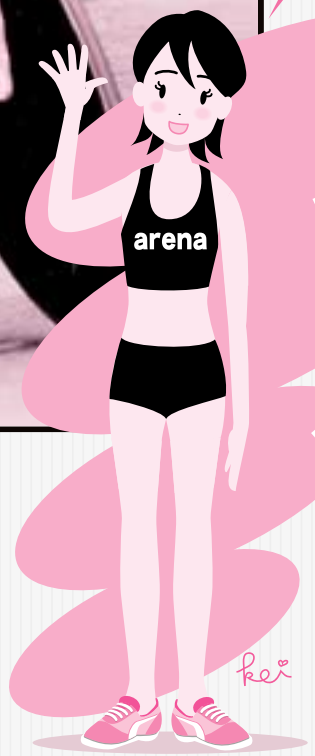
葛西奈津子の連載スポーツ・エッセイ 6

アロハ トライアスロン！



こんにちは。

ねえ、みんな。今月の写真を見てどう思う？どれも、ハワイで行われているアイアンマン世界選手権の写真なんだけど、そう、車いすの選手たちだね。

アイアンマン・レースには、プロの部門や年代別部門のほかに、**”身体障害者“の部門**があるよ。コースや距離はどの部門で出場してもまったく同じ。スタートも、号砲でいっせいに行われる。スイムではだれもがぶつかり合い、ランではみんなが声をかけて励まし合う。

95年のアイアンマン・ハワイに出場したジョンは、車いすの選手だった。交通事故で下半身まひになったけど、「**自分の姿を見て、障害のある子どもたちに希望をもってほしい**」と考え、トライアスロンを始めたんだって。3.9キロメートルのスイムは腕のかきだけで泳ぎ、ゴールするとボランティアに水から抱え上げられてハンドサイクルという手こぎ自転車（21ページ左上の写真）に乗る。180.2キロメートルを走りきると今度はマラソンレース用の車いすに乗り、フルマラソンにスタートしていく。

足で舵を取り手でこぐハンドサイクル

脳性まひの息子とともにレースする父親。スイムは息子をのせたゴムボートのロープを体にくくりつけて泳ぎ、バイクはハンドルの前に座席をつくった特別な自転車。そして、最後はランニング・バギーという、走るために適した乳母車に息子を乗せて走る。二人はこうやって、世界中のアイアンマン・レースを完走してきたんだ。

ハワイのコースは海岸に沿っていてうねるような起伏が続く。車いすだと、下りは楽でも、上りでは、ときに後ろ向きになって押さなければ体重と車いすの重さを支えられない。でもかれはとうとうその前輪でゴールラインを越え、**世界で初めて、車いすでアイアンマンになった**んだ。

日本でいう”身体障害者“は、ハワイでは**「Physically Challenged People（肉体的挑戦者）」**とよばれている。車いすを使う選手ばかりでなく、義足を使ってバイクとランをこなす選手や、伴走者といっしょに走る目の見えない選手もいるけど、完走すれば、だれもがアイアンマンの栄冠を分かち合える。

「挑戦者」たちや、70歳代、80歳代のような高齢の選手が観客の間を走り抜けるときには、ひときわ大きな声援が起こる。それは、特別扱いして応援しているというよりも、**単純に、「すごい！」と思うからわいてくるかっさいの気持ち**。障害者でも高齢者でも、鍛えられた筋肉や表情はとてもカッコイイ。写真を見て、キミもカッコイイと思わなかった？　日本のスポーツでは、一部のトップ選手ばかりがカッコイイと見られてはいないかな。残念ながら、日本では身体障害者や60歳以上の参加者を認める大会はほとんどない。**特別扱いする気持ちからは本当のバリアフリーは生まれない**んじゃないかな。

最近は、車いすバスケットや、ブラインド・サッカー（目の見えない人が、カラカラと音の出るボールを使ってするサッカー）などがテレビでも紹介されるようになったから、見たことがある人もいると思うけれど、バスケット用の車いすや目隠しを使うことで、歩ける人や目が見える人も含めて、だれもがおなじ競技を楽しめるってこと、気づいた？　ほんの少しのルールや機材のくふうと、人への思いやりがあれば、きっとスポーツはだれでもが自己の目標に挑戦し、夢をかなえ、楽しみ、そして人に感動を与えるシーンになるはず。こんなやりかたで障害者スポーツやバリアフリー社会をもっと広められるのではないかな。

●デザイン/CrazyCompany　●イラスト/Kei